

KCELS

News letter No. 14
MARCH 1999

KCELS 第23回大会を終えて

上 紀 子

今年度のKCELS年次大会は、12月6日の午後開催されました。今回は英文学が担当の年にあたり、特別講演には、日本を代表するディケンズの研究者であり、『ディケンズとともに』、『英国鉄道物語』(毎日出版文化賞受賞)をはじめとして、18世紀から20世紀に至る英国の社会、文化そして文学に関する数々の著作でご高名なディケンズ・フェロウシップ日本支部長小池滋先生(東京女子大学教授)をお迎えし、大変興味深い楽しいお話を伺うことができました。

英米文学、英語学の分野で研鑽を積んでいる卒業生による研究発表も、今回を含めてこれ迄に計47名の発表者を迎えました。そのほぼ全員がその後も研究者、教育者として各々の教育機関で力を発揮されているのを思う時、小さな歩みではあるがKCELSが着実に一歩ずつ歩んでいることを感じ、とても嬉しく思います。これから更なる前進を続けるため皆様の心からのご支援を願っております。

■特別講演(要旨)

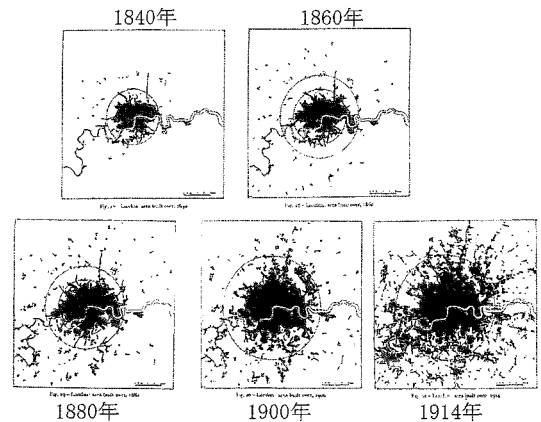
ディケンズと大都市ロンドン

小 池 滋

チャールズ・ディケンズが作家活動を行っていた1835年頃から1870年までの期間は、ロンドンが大きく変わりつつあった期間であった。そのため彼の作品には、大き



ロンドンの発展(黒く塗られた部分は家が建っている部分)



な変貌についての作家の観察と感慨が強く現れ出ている。以下、この点を項目別に列挙したい。

- (1)スプロール(sprawl)現象。図を見るとわかるように、ロンドンはずえず人口増、建築面積増によって膨張していった。これは、囲い込み現象が一般化したことにより、生活の依って立つ場を奪われた地方の農民が、ロンドンに流れ込んだことによって生じた。従って秩序や計画に従うことがなく、雑然とした形態の膨張となり、スラム地域の増加をもたらすこととなった。ディケンズ自身もそうした地域に住んだ経験を持ち、それが作品の中に色濃く反映している。
- (2)警察制度。1829年の首都警察(いわゆるスコットランド・ヤード)制度の発足以来、大きな進歩を見た。ディケンズは原則的にこの制度に肯定的で、ルポ記事も書き、小説の中でも紹介している。
- (3)救貧制度。1834年に立法化された新しい救貧制度に対しては、ディケンズは『オリヴァー・トゥイスト』などで極めて批判的姿勢を示している。
- (4)公衆衛生。下水道の整備が不完全で河川の汚染・悪臭の発生、伝染病の蔓延などの問題が大きな話題となる。ディケンズは例えば『荒涼館』に見られるように、個々の現象を局部的に捕えるのではなく、伝染病は社会階級の障壁を越えて(皮肉な意味での)平等化の結果をもたらすことを証明した。
- (5)庶民教育。初等教育法の成立はディケンズの死んだ

1870年であるから、彼の作品に登場する初等教育はそれ以前の状態を示している。英国教会系のいわゆる「ナショナル・スクール」、非宗教色が強い慈善学校、また教育養成制度の欠陥など、大都市における識字率向上と初等教育普及という明るい面の裏に隠れる暗い面に関心が注がれる。

(6)職住分離とサバービア。ロンドン周辺の田園が開発されて、住宅専用地域へと変わっていく。それに伴って通勤距離が次第に伸びていき、現在見られるような状態に近づいていった。

最初はサバーブズは場末の地域を侮蔑的に呼ぶ名前であったが、次第に富裕な家庭が健康で文化的な生活を楽しむ場を意味するようになっていく。この習慣が徐々に低い階層にまで及んでいき、例えば『大いなる遺産』の中の市内の法律事務所のヒラの事務員ウェミックまでが、郊外に「ゴシック風」の一戸建マイホームを構えることができるようになった。

(7)都市交通。都市交通に関する限り、鉄道はほとんどディケンズの作品に登場していない。(例えば地下鉄は1863年に開通しているのに、それへの言及はないように見える。)ほとんどの交通は馬車と船。庶民の通勤は(例えば上記のウェミックに見られるように)徒歩に頼っている。

結論——1846年8月30日にディケンズがイタリアのゼノヴァから手紙を書いて嘆いているように、ロンドンという「マジック・ランタン」は、彼の創作の源泉なのであって、これがないと彼のインスピレーションは枯渇してしまうのである。

■ 研究発表 (要旨)

『マクベス』を平和学で読む

奥本 京子

『マクベス』という戯曲の構成を「平和学」から読むとすると、「暴力」や「平和」の要素がどこにどのような形で存在しているのかを分析することになる。「前半(2幕1場まで)」にあった「構造的暴力」が、「後半(ダンカン王殺しの2幕2場以降)」において、主として「直接的暴力」という形に現れてくる。さらに、後半の中においては、それぞれの暴力的要素が密接に関係して、次々に新しい暴力的要素を生み出して行く。そういった暴力が、それが直接的暴力であれ構造的暴力であれ、また次の暴力を生み出しているということが、明らかになる。

戯曲の始まる以前から、善良王ダンカンの治める国、

スコットランドは、直接的暴力によって制圧された「平和」な王国である。そんな状態で幕が開けるわけであるが、前半部分においては、マクベスを中心に構造的暴力が、後半に結びつく火種の形で存在する。シェイクスピアは、コードオーの領主とマクドンウォルドをマクベスと比較・対比し、またマクベスに破壊への道を邁進させる役回りとして、魔女たちとマクベス夫人を登場させる。さらに、マクベス自身の受動的姿勢そのものが暴力を招くということを描き出すことで、「火種」を着実に印象づける。一方、後半においては、王殺し・お付の家来殺しに始まり、バンクォー殺し、マクダフ家族殺し、マクベス夫人の自殺、シーウォードの息子の戦死、マクベスの死だけに止まらず、軍隊の登場、実際の戦闘、戦闘を正当化する言語、復讐の怨念、そしてスコットランドにおける不穏で不信に溢れた乱世などにより、まさに、主に直接的暴力の支配する世界を映し出す。

すぐれた文学作品は、人間社会の現実を映し出す。「平和学的読み」によって導き出された“blood will have blood.”(『マクベス』3.4.121)、暴力がさらなる暴力を生み出す、血が血を呼ぶ、のテーマは、ポスト冷戦時代に生きる我々のテーマでもある。文学の分野から、平和学・平和研究に貢献すると同時に、平和学によって文学を読み解くということも重要である。本研究は、平和という「価値」へのコミットメントを基本に、戯曲『マクベス』を読んでみるとどうなるか、という一つの試みである。

ルネサンス期の英語におけるLow Style

——文体特徴の一考察

矢橋 知枝

本発表の目的は、Low Styleが果たす情報伝達機能をSystemic Functional Grammar (以下SFG)の枠組みから論じ、その文体特徴の考察を行う事である。

修辞学におけるLow Style (別称Plain Style)とは修飾のない簡潔な文体の事で、共にStyleの下位区分を成すHigh Style及びMiddle Styleに比し、情報を受取手に明確に伝達する機能(informative function)を持つと考えられる。Low Styleのこの情報伝達機能と関わる修辞的特徴として、propriety, perspicuity, plainnessが挙げられる。

これらの修辞的特徴をSFGの枠組みで再定義すれば、proprietyは主題と受取手を考慮した送り手の意図を反映するようテキストをコンテキストに適合させる、

perspicuityはテキストの言語構造をコンテキストに適するよう明快にする、plainnessは情報を簡潔に伝達するようテキストの言語特徴を簡単にする、と言えよう。

テキスト分析では、Helsinki CorpusからWilliam Turner, *A New Boke of the Natures and Properties of All Wines* (1568)を選び、語彙の面から考察した。分析に先立ち、SFGにおけるregister analysisの概念からfield of discourseを中心に据え、専門用語と一般語彙の専門用語的使用の二点から三つの修辞的特徴を論じ、fieldを反映した専門性の高い語彙の有無がLow Styleの情報伝達機能に大きく関わる、という仮説を立てた。

実際のテキストの分析結果もこの仮説を指示するものであり、語彙に関する限り、三つの修辞的特徴がLow Styleにとって重要である事を示し得た、と言えよう。

キャンパスニュース

- * 別府恵子教授 (1968年に着任) は、本年3月末に定年ご退職され、名誉教授とされます。4月より松山東雲女子大学学長。
- * 風呂本惇子教授は、本年3月末にご退職され、奈良女子大学大学院人間文化研究科へ転任されます。
- * Alastair Colin Lys Henderson客員教授は、1年間の任期を終えられ、本年3月に帰国されます。
- * Warren R. Frerich専任講師は、本年3月末に2年間の任期を終えられます。
- * 鶴野ひろ子氏が、本年4月に教授として着任されます。
- * 山田由美子氏が、本年4月に教授として着任されます。
- * Steven Patrick Engler氏がFrerich氏後任の専任講師として本年4月に就任されます。
- * 奥本京子氏が本年4月より大阪女学院短期大学専任講師に就任されます。

国際学会発表

- * 別府恵子氏
イタリア、John Cabot大学で開催されたNathaniel Hawthorne Society Rome Conference (1998年6月2-5日)にて研究発表。
- * 風呂本惇子氏
バハマ、ナッソーにて開催された第1回International Conference on Caribbean Literature (1998年11月4-6日)にて研究発表。
- * 東森 勲氏
英国、University of Lutonにて開催されたRelevance Theory Workshop (1998年9月8日)及びLinguistic Association of Great Britain, Autumn Meeting (同11日)において研究発表。

* 平井雅子氏

米国、ニューメキシコで開催されたInternational Lawrence Conference (1998年7月)において研究発表。

* 三宅伸枝氏

早稲田大学で開催された第15回IASIL, International Conference and Waseda International Poetry Forum 1798-1998 (1998年9月18-20日)において研究発表。

* Catherine Vreeland氏

米国、Virginia Polytechnic Instituteで開催されたBuilding the Virtual University Conference (1998年6月21日)において研究発表。

会員による出版紹介

◇朝日千尺氏

『ジェイン・エアは幸せになれるか?』(ジョン・サザーランド著、共訳 みすず書房 1999年1月刊)

◇別府恵子氏

Walt Whitman: An Encyclopedia, Ed. J.R. LeMaster et al., Garland, 1998. (共著)

『セクシュアリティと罪の意識』(岩元・鴨川編 南雲堂 1997年2月刊)

The Selected Works of Joyce Carol Oates, Ed. Beppu Rinsen Books, 1998.

◇別府恵子氏、三杉圭子氏、溝口 薫氏、C. Seton氏

『犯罪/探偵小説と多元文化社会』(別府編、共著 英宝社 1999年3月刊行予定)

◇風呂本惇子氏

『わたしはティチューバーセイラムの黒人魔女』(マリーズ・コンデ著、共訳 新水社 1998年5月刊)
『ラングストン・ヒューズ詩集—豹と鞭』(ラングストン・ヒューズ著、共訳 国文社 1998年6月刊)

◇東森 勲氏

『アクティブ・ジーニアス英和辞典』(共著 大修館 1998年11月刊)
『英語学用語辞典』(共著 三省堂 1999年1月刊)

◇伊藤栄子氏

English Historical Linguistics and Philology in Japan, Ed. J. Fisiak et al., Monton de Gruyter, 1998. (共著)

◇新野 緑氏、西条智子氏、山崎麻由美氏

『大いなる遺産—読みと解釈』(松村昌家編、共著 英宝社 1998年5月刊)

◇C. Seton氏、林 和仁氏、林なおみ氏

Power Listening Towards Cultural Literacy (共著 英宝社 1998年10月刊)

神戸女学院大学英文学会 会則

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英文学会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費など経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCELS専用の口座を利用する。

1995年4月1日施行

編集後記

会員消息、出版物等多数お知らせ頂きありがとうございました。会員の皆様方のご協力に感謝致します。

KCELS Newsletter 編集委員

(1998年度運営委員)

◇A. Banerjee ◇平井雅子 ◇溝口 薫 ◇上 紀子
◇和気(直田) 節子 (ABC順)

KCELS Newsletter No. 14

編集発行 神戸女学院大学英文学会
〒662-8505 西宮市岡田山4-1
Tel:(0798)51-8548 Fax(0798)51-8532